序

厚生省児童家庭局母子衛生課の御尽力による，小児腎疾患第２次共同研究プロジェクト「小児腎疾患の進行阻止と長期管理のシステム化に関する研究」の研究班が発足して１年が経過し，初年度の研究報告書を刊行することになった。

第１次共同研究プロジェクト「小児慢性腎疾患の予防管理治療に関する研究」の研究班が昭和60年度に発足し，当初計画した３年間の研究が完了した。その間，研究協議会常任委員各位，北川照男，酒井糾，橋爪藤光の各班長並びに，全国に広がる研究班参加の諸先生の非常な御努力で，立派な成果を得，既に報告したところであり，更にその成果にもとづき学校保健医および養護教諭・児童の親を対象にしてそれぞれの予防・管理の手引書を刊行したところである。

小児腎疾患の予防法と治療法は近時急速に進歩しており，その予後は大きく変化し改善されつつあるが，なお難治性の症例が多く，その長期管理において腎不全への進行を阻止することは重要な課題である。

第２次共同研究では，第１次研究の成果をふまえてこの課題について次の３分野の研究を進めることになった。

(1) 小児糸球体疾患の進行には，免疫機構が関与しているが，その遺伝子解析はまだ緒についたにすぎず，このほか進行因子の解明には遺伝生化学的研究が必要である。これら因子の総合的な研究による進行阻止対策，方法の研究。また、小児期腎不全の原因として逆流性腎症がクローズアップされているが，その進行を阻止し得る診断と治療規準の研究。

（班長：北川照男　日本大学教授）

(2) 小児期に発症した難治性腎疾患の管理には長期間を要するので，症状の進行を阻止しつつ，身体的にも情緒的にも正常な発育を維持することが必要であり，このための長期にわたる運動処方，食事管理の研究及び社会心理的研究。

（班長：酒井　糾　北里大学教授）

(3) 小児腎疾患患者のなかには，長期入院を必要とする者もいるが，長期入院の国療の治療の実態と一般病院での治療の比較検討によるそれぞれの治療の

長期予後の研究。

（班長：小沢寛二　国立療養所新潟病院長）

このような難題にとりくんでいるが幸い各班長及び研究に参加された諸先生の努力で，一年間の研究にもかかわらず，本報告書にみるがごとき立派な成果を得たことに対し，敬意と謝意を表する。

今後，一層の協力により次年以降に一層充実した成果をあげ得るよう念じている次第である。

終りに，厚生省当局の物心両面にわたるご支援に深謝する。

総合班長　石　丸　隆　治